

大千世界樂屋探
初編
共三本
 上

734
 /



18

文化丁丑春發兌



大千世界
樂屋探
初編 人倫之部
式亭三馬戲編

萬曆

大千世界樂屋探自序

飛虹傳の序不出すす。康熙帝

子口伎あり日月の燈風雷乃鼓板

天地间一番戲場と云ふは二千年

大世果戲房かろんを有べし

く監するにモシ大哥あるぞ至く大星の

癡呆と錫とある戯房に復讐の脚色
 有り越王の恥辱を思ふと樂室亦會稽
 子機巧有り楊妃の戯房は上妓もあはれ
 を無鹽は戯房に小田も有り業平でも
 王莽でも孔明でも辨慶でも戯房の知
 れぬで持物孔蟲虫の啼ぬでお造りあり

すや天ふ口形 招牌は虚妄あり人を
 以て云ひしめ戯房を看て明びて清貧を
 樂むは士士の戯房は金も欲の蠢愚情
 有り濁世を道へんとする老人は戯場へ余の
 欲の要要惜たもて惜心欲の戯房の
 門首是より二齣脚又聲は此と趣向の

端々我東側の柵子登り南園部
 提子あゝの隈山川草木鳥獸虫魚本林羅
 萬象擇採く何でも二十八万由旬仰で月
 宮殿也屋上を採り俯く龍宮城の厦下
 と穿つ地獄天堂春過てと秀句まぶるは
 滑稽懐諧稷雪はづるの雨露霜雪有

情非情に至るまで金さる漏さる戯房残
 鑿命て大千世界樂屋採といふ樂室
 て聲とあり味嚼さぬのまじく飲のまじ散
 してまの初編の稿就ぬ彼清女ごのり
 如く観るま物も樂屋とおぼけ守看官に
 賞を得く戯房落のまじく人ごとを驚ふ時

子文化十三年。丙子乃八月中浣江戸
せうしゆく。よきんちゆうしんちゆう
 本町の小築欲心深慶小筆を採る也。
まことひま
 亦久し以物よあそび也。

此所謂金平杖の作者

式亭三馬戲題 

朱齋監庭林信書 

有情大千世界樂屋探標目

乾坤之部

- 春雨と白雨連播乃闘詳
- 鶯と蛙が俳諧歌の會進
- 雷公と地震乃力競
- 富士山と淺間山乃夜話

時候之部

- 盆と正月乃昔話
- 元日と大晦日ハ確失
- 宵と曉との縁物語

神祇之部

- 風神と痘鬼乃店鉦
- 福神と窮鬼の靈齋
- 放生神乃利生と得て疫病神敵と討り珍談

人倫之部

○牛若辨慶五條橋の正説
 ○熊谷と敷盛と一谷組討の寔説
 ○安倍宗任梅花和歌乃事寔
 ○佐二本梶原守治川先陣乃正傳
 ○鴨越逆落義經乃胸中並雜兵の論
 ○佛御前六波羅の推參並祗王祗女嫉妬談

支體之部

○臍乃獨語
 ○手と足の信事論
 ○腹と背後と九尺二間棟割住居の喧嘩
 ○本田天憲とでんぼう束髪と風俗と論ず
 ○鼻毛と白鬚と青髭と身上話

衣服之部

○額の瘰と陰疔瘰と着衣爪紋の迷懷
 ○文字入鹿子の總摸樣と淺黄浴衣と黒羽二重の盛衰記
 並古着の後悔
 附 纏纏衣が懷舊
 ○異国張の蕨生物語
 並 典物漂流記
 附 黒縹子の帶紫縮緬の振袖が質屋流の身上以歎
 ○鬼太織が博多織小對して教訓
 ○五寸だるまれ服引と綿頭巾が口論
 ○摺箔の小袖と半襟衣装と見試
 ○晒乃手巾と草足袋との挑使

○靺鞨と雜巾と世帯吐

○河豚と鮫鱧と雪打

○酒子對て餅と直練

○東埔塞と蕃南瓜と燉打

○大福餅。醴。田樂。風鈴蕎麥。鮎。鷄卵燒。天鼓羅

の徒東西の橋詰小分て黨と結ぶ

○硯蓋乃慈姑と御算身と觀とて俊寛僧都の古懐ふ

○和中散と西瓜。反魂丹と琉球芋の喧豚

○章魚和尚里芋が為小墜落す

○鮎。唐人と譚名と魚のり假小鱈と偽て妻の

昆布と奪ふ

飲食之部

○豆腐。功小誇て蘿蔔と笑ふ

○水菓子總論

○松竹と槿花乃小田原相談

○勸學院乃雀蒙求と講じ

○神葉と蓮花と神佛問答

○蛇と蟻と蛤蝮足論

○古狸乃元頂同穴の狐格と往時と語

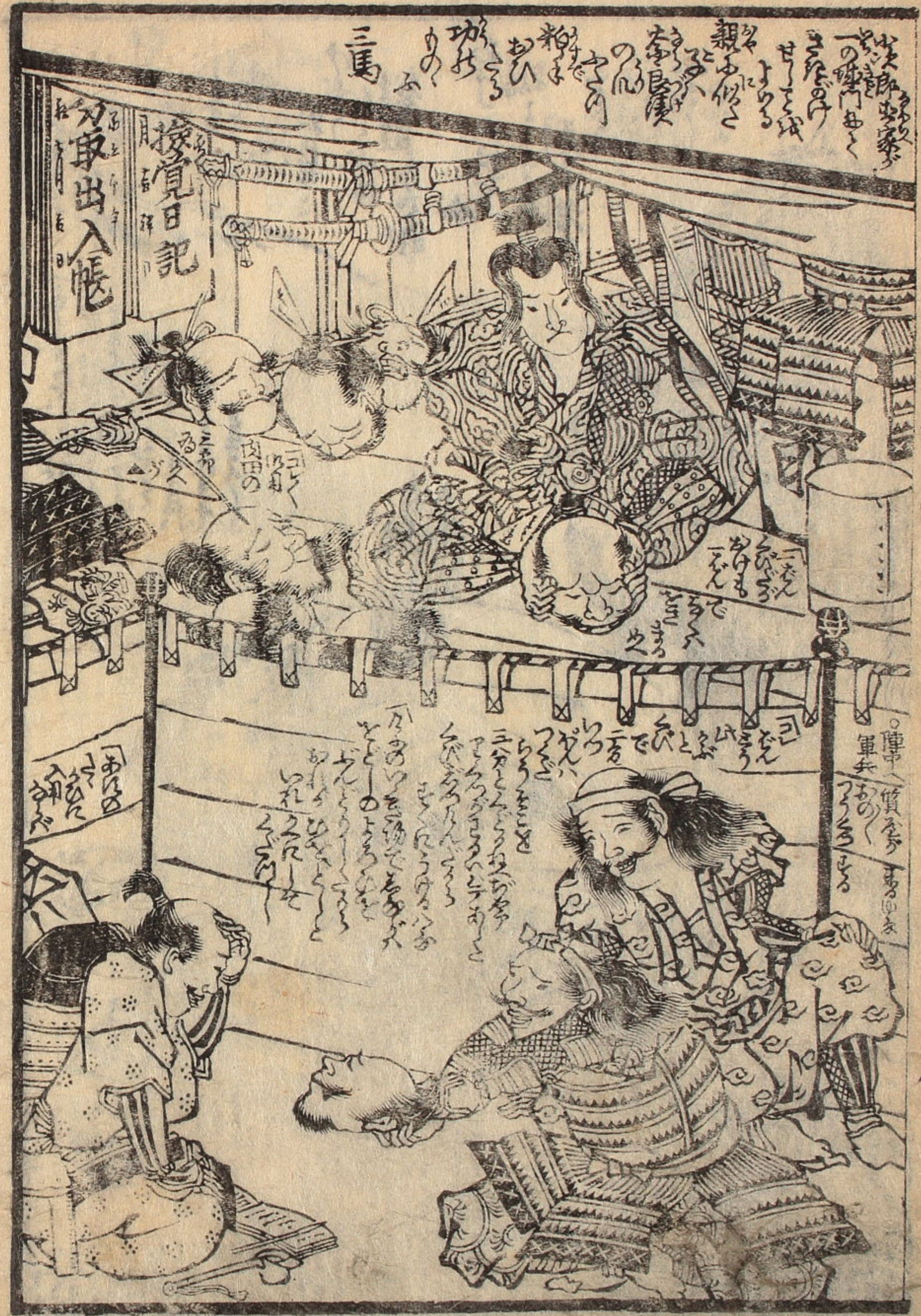
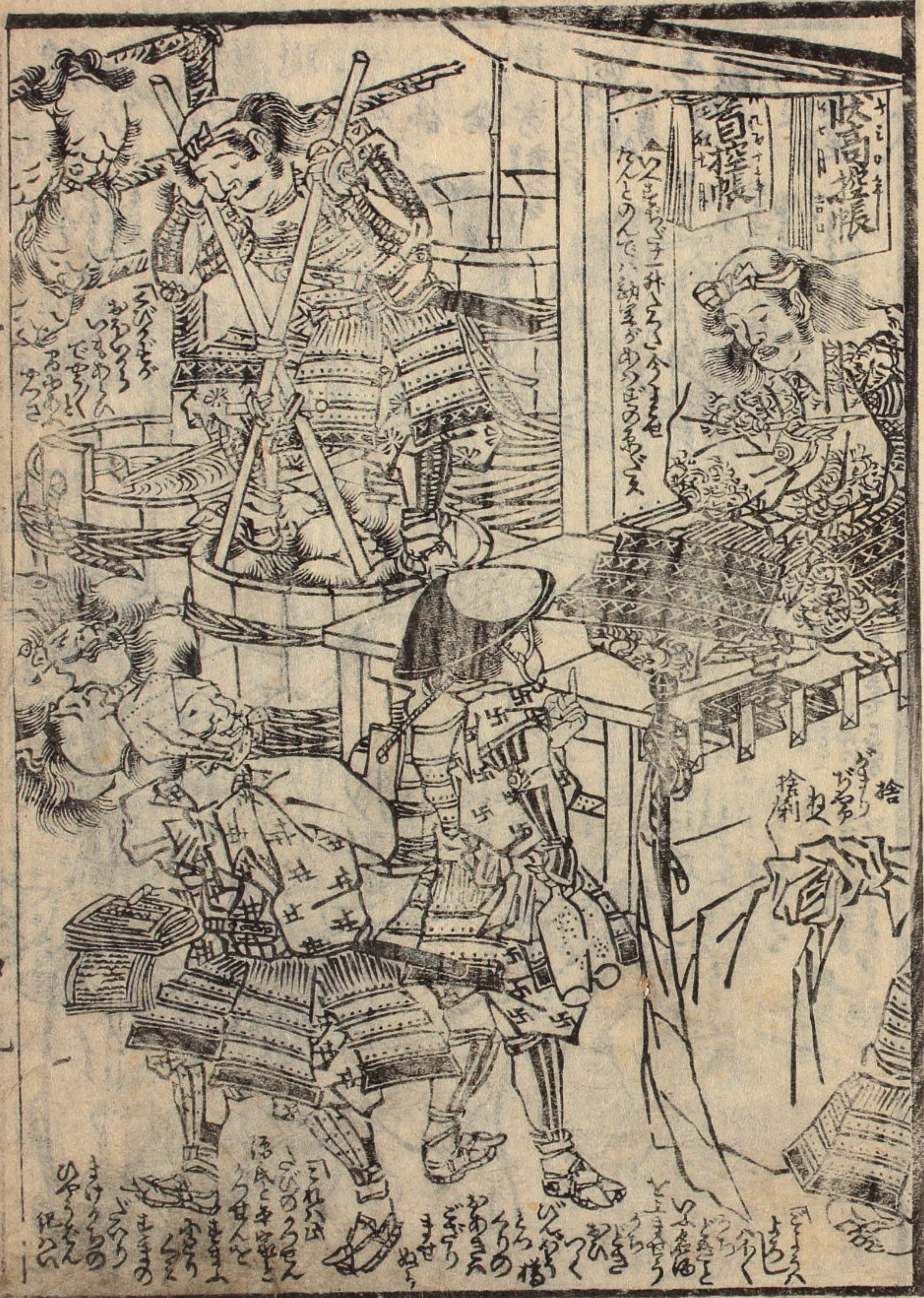
○班と面冠と白犬と塵塚小會と主と誇

○嵐無謀の升蔭と嘲は

○金魚鉢の小魚後暑に倦て古郷と想ふ

○盗猫妻戀猫と謀る

草木鳥獸之部







右五張 一陽齋歌川豊國畫

有^り情^な大千世界樂屋探初編卷之上

江戸戲作者 式亭三馬戲編

人物乃部

分

熊谷と敦盛と一谷組討の寔説

源平盛衰記の本文

修理太夫經盛の末子に無官太夫

敦盛への紺の錦の直垂に萌黄白の鐘の白生の曹
 著て滋藤の弓に十八指の護田鳥の尾乃矢の鶴毛の
 馬に乗給ひ唯一騎新中納言の乗給へ舟船を志して

一町計の遊せて浮ね沈ね漂ひ給ふ

○三馬鞍まゝの敦盛を平家の上臈狩り人なれば情も

あつたもやじ好れとる戦の場に於今風鳴乃曲を

あつた詩よ管絃の息を俵しを好むと柔弱なる一門ふ

傳流く通教酒あはれ翌日なり病酔を頭重くも可

青醒ゆきの迄氣いさご獨舟の波が如し當時なれば三馬

法用あつたきふ六百年のいみ人されば眠以眼を鮫波音お

審き且そらとらとくと馬みまごた素よりたはけり

軍とひし所詮ヤヤともいそね形勢なれば更上勝負を

好まど四つ明を俟ら嫖客のどく速く舟へと急ぐなり

るゝ容貌ハ口存の六波羅様とて色生白く弱氣なる

なり唐渡りの潘安仁京りの業平も斯やあゝんと

思ふとら江戶の俠婦も其肩ばらぬ男あり言語ハ

勿論京談の然ちやさうん鎧の著ざはるも將者束と

異なりて意氣路なれ体なるべし

敦盛むらりヤレく辛動みく車とる勝手が遠くを馬を

其の... 武蔵... 熊谷... 天晴... 敵に組... 海に馬... 大將軍... 返給... 此言... 調子... 其人品... 無屋

本文 武蔵国の住人。熊谷次郎直實の。天晴能き

敵に組をやと。渚に立て。東西伺見する所よ。これを見

付て。海に馬をさると打入れ。大將軍とて見奉れ。

まきなぐも海へ入勢給ふのうら。返給やく云云

此言語と文勢とて作者の潤色をたると後なり

三馬 按する小直實本國武蔵熊谷の産なり所謂

坂東音に調子高く。若くも濁りの今め「とさ言

」のさ言の歎あきつけ其人品をたが顔色もさうりも

無屋

其の... 武蔵... 熊谷... 天晴... 敵に組... 海に馬... 大將軍... 返給... 此言... 調子... 其人品... 無屋

黒く眼光流すものも爛き万夫不當の勇士といふ

まきなぐも海へ入勢給ふのうら。返給やく云云

此言語と文勢とて作者の潤色をたると後なり

三馬 按する小直實本國武蔵熊谷の産なり所謂

坂東音に調子高く。若くも濁りの今め「とさ言

」のさ言の歎あきつけ其人品をたが顔色もさうりも

因に之を糶糶賈の博物先生あり予其志ありて

とて所謂「とさ言」と「道者詞」乃約れり。一は同者と

同行

今よ
軍
備
師
昔
大
記
と

祐経より始り近江八幡等小至りまで各戦国の勇士あり
勇士とさして武者といふ其武者の言詰應對を武者言
といふ。むとのそと通音且。志やの反のさ也武者言と。こと
言と呼する其機ゆきうううと字義母よりして當振
の所化る所牽強附會の説をようけて人を観さんとする
予。今夜を其手なげと先生勅もよむが五音お通せりて
迹道を明多くと世將基をねらご拙くお下手の考体し
志。じ。い。う。五。音。ハ。お。通。す。る。と。も。木。曾。反。を。は。じ。て。こ。を。後

樂屋

ともいふまじ。常暗の代の神樂の大鼓。どらくともいふまじ
。どらくともいふまじ。一むん横渡り突崩さし先生
たまふに敗軍せり。▲斯本文を癡垂て間詰あそびを
指した似えんと彼太平記讀を一條を講ざる間く系譜を
訂し古更を訂し和漢暗合の更を演ふ齊しく
あそぶく怒しあふべし。
儲も直実沖の方を打え申り。敦盛が体をこるるよの海
馬をさると入れ先祖代く傳来の日丸の陣扇も自ら

彩いろどり〜とおやき丹色にのまるの日丸ひのまるなり。白しろ漆しの膠にかやる〜りけん
 其その色いろと船ふねの黒くろ。黜あざて監かんる。極ごく製せい朱しゆのわらわらず光明くわうみやう
 朱しゆとららええ〜り。○熊くま谷やひひととくく人ひとををららふふ〜り。何なにとと彼かの所ところへ馬うま
 追おひひて往ゆののと。已うかか方かたの者ものぢぢやや有ありり敵てき方かたの者ものぢぢいい。
 大おほききなな〜。ヤヤイイ。敵てきぢぢららううねね待まちちちややががれれ。トトままとと〜ハハテテナナ。トト考かう
 夫それささ味あじ方かただだ〜とと原はら價ねよよ。アア呼よびびて見み〜。トト大おほ音ね。
 〜イ〜くく其そこ色いろと往ゆぐぐのの誰たれぢぢアアエエ。敵てきるる味あじ方かた。敵てきぢぢらら各おの生な守まも。
 ココレレヤヤイイ。〜イ〜くく平ひら家やのの大おほ将しやう殿だんぢぢ〜。いい〜返かへささ〜。いい敵てき小

熊谷

背後せうろ〜るる云いががああるるのの人ひとと根こん性じやう襟えり〜らら野や郎らうと何なに曾そ。
 海うみの方かたへ討うち馬ば乗ま込こ〜。早はや返かへささ返かへららるる。ココレレ耳みみがが遠えん通つう。
 其そのぢぢははアア屎くそ。ヤヤイイ。聾えん耳みみエエ。ややんん小こぢぢ〜して長なが可かト馬うまをを。
 〇〇ライライ。待まちらら云いば待まち返かへらら。我われと誰たれと〜ありあり。口くち度ど古ふる又また〜。
 日本にっぽん第一だいいちの剛ごう者もの。沢たく度ど清きよぢぢややアア私わが堂どうのの熊くま谷や次じ郎らう直ちか實まこと云い男おとこととも。汝な等らととも返かへららるる。ママイイ待まちママ。待まちらら〜。
本文 斯く申まうささるる。日に本ほん第だ一いちの剛ごう者もの。熊くま谷や次じ郎らう直ちか實まことと
 云いけけれれば。敦あつ盛もり何なにとと思おもひひれれんん。馬うまのの鼻はなをを引ひ返かへ〜。

十九

真つて思ひけり。虚ぢやア後東男と。汝京上着ごら
逃ゆゆ後早やうはしん秘密漢教の打巻れ。サア勝
負へい。サアく戦を打始めろ。

本馬の足立程に成れり。弓矢を抛捨て。太刀
を抜。額ふめて。喚て上り給けり。熊谷待受て。上
もとて。水鞠さと蹴させり。馬と馬とを馳立て
取組。浪打際小衝と落ち。上ゆるり下にたり。二度
三度の轉りけれども。大夫の幼若あり。熊谷の古兵

熊谷屋

なりけれ。遂に上ふなり。左右の膝を以て。胃の
袖をしごと押しけれ。大夫少も働給り。熊谷の腰
の刀を拔出。既に頸を搔んとて。内胃を見けれ。十
五六計の若上薦。薄化粧に鍔漿黒あり。莞尔と
咲て見え給ふ。熊谷のめな無慙や。弓矢取身の何
やらん。是程若く厳き上臆ふ。何所小刀の立へき
ぞ。心弱ぞ思はる云

熊谷
▲コレ。主が名を何と謂ふ。何でもハア。ん。こ。亦が。伊。粧。を。夫

清盛さほの事きよむねはの事まことは終はつに大おほ平へい経盛けいせいとらふ仁にんのトツト
 の末すえの子こちやらひま徳谷 子こトびりこれより相あひま清盛きよむねとて
 身みのこごん小且こごと部べさぬでござつやころ。おれが終はつだんぶと
 めつとて。案あえの定ちぎ遠ちげん縁えんちりし。尻しりのだの大おほぶらおま憚はりながら。
 大おほア。尻しりを撒まやうまおまななでござつり中ちゆうと子こ敦とんイヤくめの
 さうさ尻でらん尻しりぢやらん男おとこぢやらん。コレ。終はつにぢやらん
 のう。其その経盛けいせいの子こちやららがア。末すえア無官ぢやらんさらん無む友ゆう
 大おほ夫おとこ敦盛とんせいとらふて。今いま年ねんで十じゅう五ごぢやらんの無へエ。蜜柑みつだん

蜜柑屋

大夫おほおとこ敦とんハテアらん耳ぢやらん。蜜柑みつだんぢやらん無官むくわんぢやらん▲ハア。
 無官むくわんでござつりやらん。終はつしてえヤアがハ。けアららぢらの軍ぐんの
 中ちゆうで白粉と金とらんの鍔ぢらはけの優長ゆうちやうららいお
 ぢやらんく正ただでもおんぢらが流石りゅうせきと上じやう指さしぢらぢら女子おんなの根
 ぢらんヤ我が折せ果くわとア。そととととと。借か早はや。え悪んおぢらぢら。
 ト考かんへア。おぢぢらく父のウニヤ。何なにのお爺おや様さまのおぢらとト。
 まんが尻で心をしてトウとれよ。茂束たぐのも終はつと監よ。
 敦とん。そりヤニア何とらいらんハ。常じやうよ無友むゆうとらいらん。

敷ハ予経書といこりや母生能いあ▲こぞ小且好待
 のお名が。蜜柑ニツ母温い蕎麦よ●あつり温盛ぢやナコリヤ
 能い。ミテ又蜜柑ニツとさうしたゆらや▲ハテさう
 ミんぐニツぢや六八ちふ動まぢやぢや●マコリヤあつり
 サク早付んせ。十六やで活こりや丈夏るん。
 [本文]生年十六に成ありと宣けり。熊谷泪とさ
 ちらと流しけり。あつり心真愛の御夏や。さてり小次郎
 と同年よや。實よ左程と御座らん云

樂屋

▲ハア十六やおなりのさうりやさう。あつりる大十六とさう
 年強ふんづん。私か息あつり下と同年でこさうて名を
 小次郎直家とや中と今朝も早己と同志と城門と
 先算さるました。十分働とよふ。モノ。小臂へ粘と
 負こららと想と何早あつりさあつり競とらや
 三歳計才お見ゆと儲むうかつりやと通り。燒野の
 雛子。昼の夜鷹子とらぬ者とさうはし後入子乃
 悲と誰でも早。同トことさう中も。坊と是とさう

目子もさてもあわてて鼻筋にりとたぐり。何も彼も
尋常ふ探さく。天人の寝童をさるるやうな人ぞ物が
はあおきぬと目中へ入れさうつてもえづくとおひらり
志中よりさきえとくあつら付取さだま。おめ入さまの
以支親を何と為る。ヤシテ其根付根を秘弁みる
洞と海あめが出やぶついで。左も右も堪られ物で
秘入。早助もさるいおめ入さまの底を突ハテ我折
果さ。まら他のまでもさる秘入が。日本第一の剛者と

樂屋

名もさるけて追籠る。落武者の癖。年弱の癖。さ
怖ともあはれ入る。響をちんちんく。留して馬とさる
く。追飯とさる。イヤヤヤヤ。世軍ある。め
中での大将殿でござは。イヤヤヤのさる。今日の日天さ
かけて虚ハ云秘入。聖さる軍止る法もあれ。命のお助
やとてさる。

【本文】是の公軍ありのあな惜やしとせんと思煩ひて。
暫押えて案じたるふの前も後も組で落の思ひ

思ひ分捕りたる間に熊谷こそ一谷まで現れ組
し敵を討てて人は取られりと云れん事の子孫も
傳て弓矢の名を折へて思返して申するに世も
助進せむと存侍れども源氏陸に充滿より云
中めり氣の強き使の軍兵一ノイ次郎公埒のめり移へコウ
何をとるもてきむれと打斬てあつりし然氣が弱ん
若らやア移へが先刻くらからつ果つる移へ人の
中さうのきとしやまもやんつ後移へんとせむ

樂屋

○又一ノきしあうめきする軍兵コウ直実子とてモシ
足下でもござんとあ入る不佞先刻くら見れ天皇
大きお倦の田のあきれらちやアござらん諸事甚痒い
く甚痒の心うちとけてうらぐとさうぬ五大力の
大きくは滞屋ぞモシちよびと見れとあスまが馬の上で
組やとよりうエソし西馬がうんとあらのとよりうこそ
是非致切形なら組で落るといふが山さとなるう諸事
西でよなるの下にあり一すいたまのあやせう

のきんぐん。のきんぐん。の軍兵。コソク。公連。と。并。暮。ま。老。
がせ。物。り。大。目。お。え。り。と。き。寤。ち。り。と。灰。水。が。抜。き。か。り。
さ。り。も。俗。物。足。り。あ。り。ま。う。平。ご。よ。の。り。や。ア。り。生。捕。り。串。
童。よ。賣。り。と。し。よ。惡。法。ぢ。や。ア。秘。り。子。それ。ご。と。大。欲。ぢ。り。の
只。の。親。仁。で。あ。り。ま。い。足。浪。お。き。と。と。ア。イ。さ。ま。う。あ。り。だ。
と。と。も。欲。心。を。捨。る。あ。り。婦。人。よ。さ。り。ト。沖。の。方。ヲ。マ。シ。
婦。と。し。く。向。の。船。を。え。り。平。家。の。軍。船。と。は。婦。子。扱。ひ
が。せ。一。面。よ。美。し。い。と。く。真。中。に。松。扇。を。ト。口。の。下。へ。刺。て

樂屋

あ。つ。ら。を。え。り。て。あ。り。の。の。ヤ。シ。ヤ。が。せ。他。一。は。り。大。ま。の。う。ら
松。扇。で。扇。き。と。あ。り。と。く。私。籠。り。し。ゆ。を。り。出。し。て。あ。り。移。造。
や。め。り。や。う。け。り。く。奇。と。妙。と。お。そ。り。の。子。が。一。面。よ。美。し。い。
移。り。と。の。お。子。と。あ。り。討。死。も。厭。り。移。り。ぞ。ア。分。捕。高。名。
仕。り。た。ら。ナ。ド。と。く。の。の。娘。り。一。娘。り。も。は。後。援。ご。
一。面。よ。美。し。い。傍。の。中。年。務。ス。男。好。の。と。り。風。で。一。見。ま。の
利。く。面。ご。の。内。ご。二。三。枚。連。て。ま。り。入。一。惜。い。お。を。平。家。お
あ。り。的。扇。の。玉。虫。ま。り。お。の。り。も。一。矢。放。て。入。ス。

○按おどはよよ何なにも未ま結けつ扇せんの的てきを檀たん比ひ浦うら乃なり戦たたかひなれば
是これより後のちの事ことなるをいふも諸しよる不ふ定ぢやう若わか未ま用もち派はい
家いえあする結けつ術じゆつありし後のち人ひと巨こく考かう索さくありし也なり。

トキ二次郎公とまじり「コ」がうらる。それでも日本一
る「へ」香かう園えん彩さいが噴く鼻びと「西せいの兵へい」別わか者ものよりまじり「香かうの
物ものあり古ふるい糠ぬか漬づけの茄子なすと「只ただ志しがらうし候まじりとぬくと
切きて蓋かきおへ入いれて茶ちやをうり貫ぬふ中ちゆうのこあつも娼おん妓きと
「夏なつ新しんと二ふた人にんのお樂らくと「酒しゆをちやア移うつ入いる。慈あはれ谷やらうりふこの
るはまきよりの也なり。

樂屋

敷盛敷盛の打うちむらひ。▲のの通とほりの惡わるむらうも早はや大おほ勢せきの軍兵ぐんべいが駈かける
中ちゆうでどざるら。拙せつ者ものが助すけりし所ところが放はな輾ぜん舞まいをみる中ちゆうら
物もので他人たにんが又また擡たぐい。夫つまがらうアだめなるゆと。ハア何なんとぬら。
迎むかへも早はや逃のがるゆの移うつるも。是こゝ期きをさるせ入いる。其その代しろはおめ
さるの菩ぼ提だいをが吊たりしと。サア。是こゝ期きの社やらうとさる
かまふ。あんまじり。

【本文】迎むかへも道みち給たまへき御身おんみなう。御ご菩ぼ提だいをが直ちか實じつ
能あく訪たづひ奉たてまへ。草くさの陰かげめて御ご覽らんぜよ。疎そ畧りやく

努力候まどとて。目と塞ぎ。齒を噛合せて。涙が
流し。其首を搔落と。無慙とらふも愚心なり。敦盛
死を恐れど心を降さざ。幼齡の人なりとも。頗
庸の類は非ざりけり。平家の人くら。今討れ給近も。
情ぞ捨給り。此殿軍の陳むても。隙も吹人の思
ろくにこそ。色あひなき漢竹の笛を。香もらりし
錦の袋よ入て。鎧の引合よ指ま。熊谷是を
見奉り云云

樂座

▲軍をみる小笛を拵て出。イマハヤのやうな道
竹夜笛を吹中。太鼓を打中。ひびく。と
駱駝が。又平家の陣で討死の引道。と
軍に。と。へん。と。の。

本文 最欲や此程も。城中に此曉も物の音れ聞つる
此人あて御座る。源氏の軍兵。東国より數萬騎上
たれ共。笛吹者一人もなし。如何なれば平家の公達。の
加様は優に御座らんとて。涙を流て立ち。彼

笛ふえと申まをさるる。父ちち經つとむ盛さか笛ふえの上手うまにて御ご坐まるるが。砂さ金きん
 百ひゃく兩りゆう宋そう朝てうは渡わたされて。能よき漢かん竹ちくと一いっ枝し取と寄よせ。殊ことに能よき
 兩りゆう節せつの間まを一いっ節せつ取とり。天台てんたい座ざ主しゆ前ぜん明めい雲うん僧そう正せいに仰おほせ
 られて。秘ひ密みつ瑜いう伽が壇だんふ立たて。七しち日にち加か持ぢして秘ひ藏ざうして彫おほ
 らるるに。笛ふえのそと子こ息そく達だつの中ちゆうに。敦あつ盛さか器き量りやうの仁にん
 なるるとて。七しち歳さいの時ときより傳つたへ持もたれるけり。夜よ深ふかる儘ままに
 さえされが。小せう枝しと号ごうられるあり云い云ん
 有情うじやう 大千だいせん世界せかい樂がく屋ゐ探たん初しつ編へん卷くわん之上じゆう畢ひ
 樂がく屋ゐ

笛ふえのそと子こ息そく達だつの中ちゆうに。敦あつ盛さか器き量りやうの仁にん
 なるるとて。七しち歳さいの時ときより傳つたへ持もたれるけり。夜よ深ふかる儘ままに
 さえされが。小せう枝しと号ごうられるあり云い云ん
 有情うじやう 大千だいせん世界せかい樂がく屋ゐ探たん初しつ編へん卷くわん之上じゆう畢ひ
 樂がく屋ゐ

名な無なのそと子こ息そく達だつの中ちゆうに。敦あつ盛さか器き量りやうの仁にん
 なるるとて。七しち歳さいの時ときより傳つたへ持もたれるけり。夜よ深ふかる儘ままに
 さえされが。小せう枝しと号ごうられるあり云い云ん
 有情うじやう 大千だいせん世界せかい樂がく屋ゐ探たん初しつ編へん卷くわん之上じゆう畢ひ
 樂がく屋ゐ

